

「稲むらの火の館」

開館10年を迎えました

「稲むらの火の館」は平成19年4月22日に開館して、本年丸10年が経過いたしました。

「濱口梧陵翁」の偉業と業績を顕彰するために、「濱口梧陵記念館」と梧陵翁ゆかりの津波防災施設「津波防災教育センター」が造られ「稲むらの火の館」と名付けられました。



梧陵翁は安政津波の際、すばやく広村の人々に避難を呼びかけ多くの命を救ったということは皆さまの知

るところです。そして、あの行動を文豪ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲が「A Living God」(生ける神)として著されました。それを、湯浅町出身の中井常蔵氏が翻訳、小学生にも理解できるように書き改め、小学校の国定教科書に掲載されたのが「稲むらの火」です。こうして「稲むらの火」が長く津波防災の教材として活用されるようになりました。これが「稲むらの火の館」の誕生へと繋がっていくのです。

「館」はこの10年の間、記念館として防災施設として数々の実績を上げてきたと思います。平成23年、東日本大震災が起こり千年に一度といわれた大津波に襲われました。日本人であれば、あの津波を目の当たりにして津波に無関心ではいられなかった。「稲むらの火の館」の見学者は一気に増加しました。館内の見学だけではなく、梧陵さんの造った「広村堤防」を見学する方々も増えました。こうした見学を通して津波の時にはすぐに避難をするということ、心に留めて欲しいと願ったものです。

平成27年、和歌山県では全国規模の催しが続きました。全国高校総体、国体と何十年に一

度の事です。7月の全国高校総体の総合開会式に御臨席された皇太子殿下が、この際の地方視察の一環として来館されました。たいへんな光栄のことと、多くの町民の皆様と共に歓迎し、お声をかけていただいた事に感激しました。



その熱が冷めない9月、今度は国体の開会式に御臨席された天皇皇后両陛下が御来館されました。皇太子殿

下が視察された施設を、同じ年の2ヶ月後に両陛下が視察されるということが、過去にほとんど例がないそうです。本当に言葉に言い表しよらない、光栄な出来事でした。このことによって、津波防災と『稲むらの火の館』が皆様にあらためて関心をもってもらえたと確信し、防災・減災の更なる進展を心に誓ったものです。

平成27年にはもう一つ大きな出来事がありました。第70回国連総会で「稲むらの火」の11月5日が「世界津波の日」に制定されたことです。このことによって、世界中で津波の際の避難の重要性を理解していただくきっかけになったと思います。各国の駐日大使や総領事の方々が御見えになっていません。館内の案内等が多言語化もされました。



10年ひと昔と言いますが、開館以来10年でこんなにもいろいろの出来事があったのです。4月22日を迎えて感慨ひとしおですが、次の10年に向けて更に精進して参りますので、皆様の御支援と御協力をお願い申し上げ、今一度「館」の見学にお越しく下さい。

濱口大明神縁起 (その5)

濱田康三郎(かわせみより)

『ハーン氏の「生ける神」は三節に分かれて居ります。第一節には日本の神道の社の神秘的な様子や日本の神々の特性等を述べて、日本には現在生存中の人間の靈魂をも神として崇め祭る風習がある。紀州有田郡のハマグチ・ゴヘイの如きもその一例であると記し、第二節には明治以前の時代に於いて多くの村の団体を支配していた或る法律、というより、もっと適切に云えば、法律と同じだけの有らゆる力をもっていた風俗、について簡単な解説をなし、いよいよ第三節に入ってハマグチ・ゴヘイの事績を詳細に叙述し、最後に、どうして百姓達はハマグチの生存中に彼の靈魂だけを祭って、それで何の矛盾をも感ぜずにいられたのであろうか。云々、という風の意味深い数段をつけ加えています。

『第三節に書かれてあるハマグチ・ゴヘイの事績は、次の通りであります——』

遠い太古の時代から、日本の海岸には幾百年の不規則的な合間々々を置いて、非常に大きい海嘯——地震だとか海底火山の爆発だとかによってひき起こされる海嘯が、襲って来ます。此の恐ろしい海水の不意の暴溢を、日本人は『つなみ』と呼んでいます。つい最近の例としては、一八九六年(明治二十九年)六月十七日の夕方、長さ二百里もある巨浪が、宮城、岩手、青森の東北地方諸県を襲い、幾十かの町々村々を全滅させ、各地をくまなく破壊し、約三万の人命を奪いました。ハマグチ・ゴヘイの物語は明治をずっと以前に遡った時代に、日本の他の海岸地方に起こった大津波についての物語であります。

彼は彼を有名にした此の事件の起こった時には、既に老人でした。彼はその住村では最も有力な人物で、年久しくムラオサ即ち村長を勤め、村の人々の尊敬と愛情とを一身に集めていました。人々は彼をおじいさん——即ち祖父と呼びました。然し、村内切つての富豪であつたの

で、彼は時々長者と公に呼ばれました。彼はいつも村の小百姓達に色々有益な注意をしてやったり、争論を仲裁してやったり、必用な場合には金銭を立て替えてやったり、彼等の米を出来る丈よい値段で売捌いてやったりしました。

(つづく)

<千葉県からのお客様>

5月10日 千葉県ナンバーの車が駐車していました。遠くからのお客様と置いていたところ、館内見学が終って帰りがけにお声をかけていただき、お話しをさせていただきました。

「三宅良斎」のことを調査している団体の方だったのです。千葉県佐倉市から来られたということで、「濱口梧陵」さんと「三宅良斎」との出会いから関係を知りたくて、当館まで来ていただいたとのことで、念願が叶ったそうです。



「三宅良斎」は蘭学医だったのですが、最初江戸で開業しようとしたが、当時江戸はまだ蘭学医は認められていなかったのか、漢方医が幅をきかせていたためか、開業できなかったのです。仕方なく、銚子へ下り開業し、そこで梧陵さんと出会ったのです。江戸でコレラが流行した時にもその診療に奔走し、梧陵さんが銚子への侵入を防ぐために、関寛齋にその防疫を学ばせたのも三宅良斎等でした。「種痘所」再建支援も、「良斎」の口ききで実現したようです。「種痘所」は現在の東京大学医学部へ繋がっているのです。

(上の写真は、銚子ヤマサ本社横の濱口梧陵紀徳碑)

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です。